

和泉式部日記と和泉式部家集との関係について

— 諸説をめぐって —

三十四回生 福盛 みゆき

和泉式部は、平安女流歌人として名を成し、特にその恋愛遍歴から自由奔放に生きた恋愛歌人と評せられている。和泉式部の生涯に大きく影響を与えた男性は、橘道貞・彈正宮為尊親王・その弟君帥宮敦道親王・藤原保昌などである。この中の敦道親王との愛の経過を記したものが「和泉式部日記」である。この日記には、一四七首の和歌が収められていることから、歌日記と呼ばれることもあり、日記を考察するうえではこの和歌を中心に検討していかねばならないと思うのである。ここでは、日記歌一四七首と、和泉式部家集との関係に焦点をあてて考察していくことにする。

和泉式部の家集は、五類（第一類―和泉式部集、第二类―和泉式部統集、第三類―宸翰本和泉式部集、第四類―松井本和泉式部集、第五類―雑種和泉式部集）に分けられる。和泉式部日記には和歌が一四七首（連歌は二首に数え、唱和も含む）収められており、その中の六五首（内三首は重出歌）は、第一類和泉式部集にも見出される。ここでいう

第一類に属する和泉式部集は、第二类に属する「統集」に対して通常「正集」と呼ばれ、本稿でもそれに従うことにする。現存する家集（正集）と和泉式部日記とは、六五首の歌が共通することから、何らかの関係があるのではないかとされているものの、諸説によって様々である。私が試みた方法にそって、諸説の様相をめぐり、考察を試みたい。家集と日記との関係をさぐる一つの手順として、日記歌を家集の番号順に整理する方法を試みた。表にまとめると次のようになる。

十	882	一	227
十一	221	二	228
十二	883	三	877
十三	884	四	878
十四	885	五	229
十五	886	六	230(891)
一六	887	七	879
一七	222	八	880
一八	223(888)	九	881

※ 和数字は日記中、家集と重出する歌の通し番号

六四 六五	429	五五	420	四六	411	三七	403	二八	897	一九	224(889)
	430	五六	421	四七	412	三八	404	二九	898	二〇	225
		五七	422	四八	413	三九	405	三〇	899	二二	890
		五八	423	四九	414	四〇	406	三一	900	二三	231
		五九	424	五〇	415	四一	407	三二	901	二四	892
		六〇	425	五一	416	四二	408	三三	902	二五	893
		六一	426	五二	417	四三	409	三四	400	二六	894
		六二	427	五三	418	四四	4	三五	401	二七	895
		六三	428	五四	419	四五	410	三六	402		896

洋数字は和泉式部正集の番号

() は正集、続集内の重複歌

二二七と二二八、二二九と二三〇、二二二と二三三、二二四と二二五は宮と式部の贈答歌であり、宮の歌は、二二七、二三〇、二二二、二二五、四〇六(連歌)である。

表より、日記中家集と重出する歌は、家集では三グループに分類されることがわかる。(正集二二一〜二三二(二二六は除外)、四〇〇〜四三〇、八七七〜九〇二)そして歌はこのグループ内では順序よく配列されている。

ここから伊藤博氏は、「原和泉式部集」を想定されている。伊藤氏はその根拠として次のように述べられている。第一に「三つに分けられる歌群があまりにも分散しすぎているし、歌の順序も混乱しすぎること」、次に「日記の製作者が帥宮と式部の贈答歌または宮と直接関係のある歌だけをえらび、日記に採用したのならともかくも、その詞書から判断して帥宮とは関連のない歌が、三十首あまりも日記にとりいれられている」こと、第三に「現存家集で二二三番から二二三番まで帥宮関係の歌がつついた後の、二二三の歌、

十月ばかり帥宮より「いかにつれづれ」と
のたまつれば

花見にとくらしし時は春の日もいとかく長き心ち
やはせし

が、日記に採用されていない。明らかに帥宮とは関係がある歌であるが、これは原歌集には採用されておらず、現存

家集の成立過程において収録されたものである。^{注4}「そして氏は、三つの歌群から原家集の歌の順序を想定され、はからずも日記の歌の順序と全く一致し、「両者の関係が全く一致するのは何故か、十分な説明はできないが、恐らく家集も日記の性格（年代的性格）をもっていった。^{注5}」と結論を出されている。

このように日記の素材として矛盾のない『原家集』の想定を考えておられるのは伊藤氏だけではない。清水文雄氏は「日記制作の資料となったものと考えられる原家集」と言われ玉井幸助氏は、家集にある日記歌と家集にもれている日記の歌とが「高次の一群をなして和泉式部日記の素材ともいうべき原歌稿の形をもっていたのではないか」と言われている。

また山田清市氏は夫木抄に見出される式部の歌を通して「和泉式部家集には現歌集と内容形態を異にする日記の素材となった祖家集とも云うべきものが明らかに存在していた^{注8}」と述べられる。山田氏の説のもっとも重要な論拠となったのは、夫木抄に存在する式部の歌は現歌集のいづれにもないものを七首含み、且この中の二首は日記にある式部の歌と一致することである。一致する二首をあげる。

ふれは世のいとくうき身のしらるゝをけふなか雨に
水増さらなむ
(夫木抄卷一九)

ふれは世のいとくうさのみ知らるゝにけふのなかも
に水まさらなむ
(日記)

いまはよもきつもせしかしおほ水のふかき心はなに
と見せつゝ
(夫木抄卷二六)
いまはよもきしもせしかしおほ水のふかき心は川と
みせつゝ
(日記)

夫木抄に採られた式部の歌の素材を考えると、日記との重出歌は僅かに四首であるから、日記より抽出されていないことは明らかであるとされ、現歌集に素材を求めても現歌集にも全然含まれない前述の七首の歌の存在を考えると、之も首肯しがたいと考えられ、現歌集の系統と異なった和泉式部家集「祖家集」を想定されたわけである。

以上述べてきたことは、和泉式部日記と現存する歌集には、「素材」としての関係において「原家集」なるものが想定されるということである。しかし「原家集」を想定せずに現存する家集を日記の材料であるとされているのが、今井卓爾氏である。今井氏は、和泉式部物語は、式部以外の人が和泉式部になつたつもりで著したものだと推定され、歌を中心にして、そのつなぎ目をうめる為に地の文が入り込んでいくという作品の形は、材料さえあれば最も簡単に出来るものであるとされる。すなわち材料が和泉式部の家集というわけである。

また川瀬一馬氏は「和泉式部日記は藤原俊成の作^{注11}」という論文において、黒川家舊蔵本と呼ばれる写本について寛元四年書写の奥書、日記中の和歌が後拾遺集以下の勅撰集に採られていないこと、後成の家集の中に日記中の和歌と類似した歌が少なからず見られることから、和泉式部

の作者は藤原俊成とされる。

日記の自作説、他作説の問題は念願に置きながらも、これらの説をふまえた上で、次に家集と日記歌を詞書と地の文の描写によって比較する方法を採ってみる。

※ 和数字は日記中家集と重出する歌の通し番号である。

(ページ数は岩波文庫「和泉式部日記」による)

(家集)

(日記)

一、帥の宮、橘の枝を給はりたりし

橘の花を取り出でたれば：はかなきことをと思ひて

P12

四、夕暮に聞こえさする

帰り参るに聞ゆ

P19

五、大雨の朝、「宵はいかが」と宮よりある御返事

いたう降り明かしたるつとめて、「今宵の雨の音はおどろくしかりつるを」などのたませられたれば

P27

七、鳥の声にはかられて急ぎ出てて憎かりつればころしつとて羽に文をつけてたまへれば

「今朝は鳥の音におどろかされて、にくかりつればころしつ」とのたまはせて、鳥の羽に御文をつけて

P33

八、月あかき夜、あるやうあり

宮にて月の明かゝりしに、人や見けんと思ひ出でらる

P46

一一、月の明かき夜人に

るほどなりければ、御返し月の明かき夜、うち臥して「うらやましくも」など、ながめらるれば、宮に聞ゆ

P37

一二、月明かき夜人に

女は、まだ端に月ながめてゐたるほどに……

P37

一四、七月七日

かくいふほどに七月になりぬ。七日すぎごとども、する人のもとより、織女・彦星といふことどもあまたあれど

P42

一七、石山に籠りたるを久しう音もし給はで帥の宮

八月にもなりぬれば、つれづれも慰めむとて、石山に詣でて七月ばかりもあらんとて詣でぬ。宮久しうもなりぬるかな、とおぼして御文つかはずに

P45

一九、また「いつか出でる」とあれば(二三)

いつか出でさせ給ふ」とあり。(中略)いつかとのたまはせたるは

P46

二二、石山にありけるほど、宮より「いつか出でる」などのたまひけるにや

二三、出でてきこえさす

二四、風吹き物あはれなる夕暮に

二五、ことごとしうち曇るものから、雨の気色ばかり降るは、せんかたなくて

二七、つゆまどろまで、歎き明かすに雁の声を聞きて

前に同じ

かゝるほどに出でにけり

風いたく吹きて野分だちて雨など降るに、つねよりも心細くてながむるに御文あり（中略）御かへし

ことごとしうかき曇るものから、たゞ気色ばかり雨うち降るは、せんかたなくあはれにおぼえて

端に臥したれば、つゆ寝らるべくもあらず。人はみなうちとけ寝たるに、そのことと思ひわくべきにあらねば、つくぐと目をのみさまして、なごりなう恨めしう思ひ臥したるほどに、雁

P48

P50

P52

二八、九月ばかり有明に

三〇、人恋しきに

三四、霜の白き朝寒

三六、おそく参り、いみじく佗おれば

三八、「手枕の袖」は忘れ給ひにけるかとのたまはせたるに

三九、「月は見るや」とのたまはせたるに

のはつかにうち鳴きたる：（中略）いみじう堪えがたき心地して

大空に西へかたぶきたる月の影遠く澄みわたりにみゆるに

「のたまはせることは、いかでか」とばかりにて

女も霜のいと白きにおどろかされてや

この童の「いみじうさいなみつる」といふがをかしうて、端に

手枕の袖は忘れ給ひにけるなめりかし」とあれば

問はずれば、宮の御文なりけり。（中略）妻戸押し開けて見れば、見るや君さ夜

P53

P54

P57

P65

P67

P68

うちふけて山の端に限なく
澄める秋の夜の月

P69

四〇、檀の木の老いたる
を見せ給ひて

をかしげなる檀の紅葉のす
こしもみぢたるを折らせ給
ひて、

P71

四二、霜の白きつとめて

霜いと白きつとめて

P73

四四、宮より「紅葉見に
なむまかる」との
たまへりけれどそ
の日はとどまらせ
給ひて、その夜風
のいたく吹きける
れば、つとめて聞
ゆ

「このごろの山の紅葉はいか
にをかしからん。いざ給へ、見
ん」とのたまへば、「いとよ
く待るなり」と聞えて、その
日になりて、「今日は物忌」
と聞えてとゞまりたれば、
「あなくちをし。これ過ぐし
てはかならず」とあるに、そ
の夜の時雨、つねよりも木
々の木の葉の残りありげも
なく聞ゆるに、目をさまして

P74

五五、心地あしき頃、「い
かが」とのたまは
せければ、

「このごろの山の紅葉はいか
にをかしからん。いざ給へ、見
ん」とのたまへば、「いとよ
く待るなり」と聞えて、その
日になりて、「今日は物忌」
と聞えてとゞまりたれば、
「あなくちをし。これ過ぐし
てはかならず」とあるに、そ
の夜の時雨、つねよりも木
々の木の葉の残りありげも
なく聞ゆるに、目をさまして

雨風などいたう降り吹く日
しも訪れ給はねば、人少な
なる所の風の音をおぼしや
らぬなめりかし、と思ひて、

五七、「文作るとて人々
あれば」とのたま
はせられたれば

五七、「文作るとて人々
あれば」とのたま
はせられたれば

十一月ついたちごろ、雪の
いたく降る日、

P89

五〇、雨風はげしき日し
も、おとづれ給は
ねば、聞こえさす
る

「おほつかなくなりにつれ
ば、参り来てと思ひつるを、
人々文つくるめれば」との

「おほつかなくなりにつれ
ば、参り来てと思ひつるを、
人々文つくるめれば」との

「おほつかなくなりにつれ
ば、参り来てと思ひつるを、
人々文つくるめれば」との

「おほつかなくなりにつれ
ば、参り来てと思ひつるを、
人々文つくるめれば」との

暮つ方聞ゆ。

P84

やうく入りはつる日影の
心細く見ゆれば、例の聞ゆ

P86

又の日の、まだつとめて、霜
のいと白きに、「たゞ今のほ
どはいかゞ」とあれば、

P87

例のあはれなることども書
かせ給ひて、我ひとりおも
ふ思ひはかひもなし同じ心
に君もあらなん

P87

かくて女、かぜにや、おど
ろくしうはあらねどなや
めば時々問はせ給ふ。

よろしくなりであるほどに、
「いかゞある」と問はせ給
へれば、

「おほつかなくなりにつれ
ば、参り来てと思ひつるを、
人々文つくるめれば」との

P88

「おほつかなくなりにつれ
ば、参り来てと思ひつるを、
人々文つくるめれば」との

P89

たまはせられたれば、

P89

五八、霜いと白きつとめて、「いかが見る」とのたまはせられたれば、

P90

六〇、つくづくと泣くけしきと御覽じて

P92

六一、とのたまはずれば、心細き事のたまはせつるを、心みだれて

P92

六五、なほ世にもありはつまじきことのためはすれば

「猶世の中にありはつまじきにや」とあれば、

※ ここに挙げた例は家集中「人に」「御かへし」

などの詞書以外を詞書としている和歌である。

この詞書と地の文は類似している。類似というよりも、詞書は巧みに地の文に融合している感じさえ受けるのである。そして「人に」「御返り」などの詞書も相手が帥宮で

あることを暗示している。四、「夕暮に聞こえさする」と、二四、「風吹き物あはれなる夕暮に」の詞書の「夕暮」が本文に明らかにされていないが、それ以外は、言葉として日記の地の文に表現されている。これを大橋清秀氏は「有機的に本文に生かされている」と述べられている。歌と地の文がいかに融合していたかを物語るものとして次の例があげられる。

消えぬべき露の我が身はもののみぞあゆふくさはに悲しかりける (正集 八九五)

たゞ今も消えぬべき露のわが身ぞ、あやふく草葉につけてかなしきまつに (日記)

今にも消えてしまいうような露のわが身が、「あやふ草」のように不安に思われ、風になびく草葉を見るにつけても、悲しくなるままにと解されるが清水文雄氏は「もと独立していた一首の歌が、地の文に融化したもの」と述べられる。この歌の前後の散文と和歌とが、類似し、言葉の上でつながっていた故、書写の段階において誤写されたものであることが、通説となっている。このような例もあるように、詞書と地の文は、まさしく有機的に巧みに融合していると思われる。

次に詞書が地の文ではなくて帥の宮の歌と対応している例をあげよう。三九、「月は見るや」とのたまはせたるに(正集四〇五)と五四、「同じ心に」とあるかへりごとに(正集四一九)である。これらは帥宮もしくは他の誰かから「月は見るや」「同じ心に」と言ってきた返事だと思わ

れる。日記ではこれらは一首の独立した歌によって表される。

(宮) 見るや君さ衣うちふけて山の端に限なく澄める
秋の夜の月

(宮) 我ひとりおもふ思ひはかひもなし同じ心に君も
あらなん (傍点引用者)

前者に関しては、日記内の矛盾点として指摘されているが、これは秋の歌(宮の歌の最後の句「秋の夜の月」により秋とみなす)が、十月に入っていることが不自然であるというものである。この矛盾点を考えるに、内容を追って前後の関連をみると、そのつながりは自然である。「見るや君」の歌に対する返歌、

ふけぬらんと思ふ物から寝られねどなかくなれば月
はしも見ず

も、贈歌を受けているのは明らかであり、月日を考えさえしなければ何ら矛盾が感じられないことから、「これは当日記の資料を前にした執筆者の著作態度が大いに影響している」ことをふまえた上で考えれば、この矛盾点は説明できるように思われる。

私がこの二つの歌と詞書の関係で言いたいことは、詞書は明らかに日記の宮の歌をふまえていることから、家集と日記には作者が日記を著作する段階において、密接な関係があったということである。現存する家集をそのまま日記の素材にして書くことは、前述した「原家集」を想定する根拠(家集では日記歌が三グループにわたって分散して

存在すること、日記だけにみえる帥宮の歌六十首、式部の歌十数首の拠りどころに欠けること)から、不可能であったと思われる。そこで、「日記」「家集」にみられる矛盾点を解決するべく、両者の共通の素材となった「原家集」が存在したと、伊藤氏・山田氏・清水氏・玉井氏はみておられる。さらに、宮本美万子氏は次のように述べられる。

家集での歌の配列について、「九九から一〇七の一拵とこれに続く、一〇八から一一〇の一拵との二拵を通して云えることは、歌物語の性格を帯びており、そこで推測されることは、和泉式部がその手許の歌反故、消息文、贈答歌を整理するとき、物語的嗜好の趣くままに、詞書等を加えていったということである。更に、統集の前述部分(一四八三〜一五四六の日付け順の部分)からは日記的傾向を挙げることが出来ると思うのである。そしてこれは『和泉式部日記』の資料となった歌日記的なものの存在を推測する場合の参考となるかと思われる。」

このような「原家集」「歌日記的なもの」を想定することは、現家集と日記の相連の溝を埋めつくすことができる。しかし、これらは、あくまでも想定であり仮定である。「原家集」は、それぞれ唱えられる諸氏によって様々に構想され、統一的な見解は見出されていない。先述した家集の詞書と日記の地の文との比較により、作者の手許には素材となった歌反故、消息類があったと想定することが可能だと思われる。鈴木一雄氏は「かりに『原家集』なるものを、もっとも低次の段階でとらえるとすれば、その質は和泉式

部の手許にあった手控えの贈答歌群、つまり歌反故や消息類の束をもとにして書かれている説とほぼ変わらないことになつて^{注18}との見解を出されている。氏の説は妥当な説であると推測するのである。

つまり、和泉式部日記は、作者―式部が帥宮との恋が成就するまでの二人の愛の行方を物語った贈答歌、歌反故を素材として、それに詞書的なものを添え、時には散文描写、自然描写を加えながら、九ヶ月間の日々を書き綴ったものではなからうか。そして、そこには書かずにはいられなかった式部の心の世界があつたと思われる。私が、ここで考察してきたこと―それは、和泉式部日記と家集との関係は、その素材にあつたということである。

△注▽

1、「原和泉式部集の想定」文学語学 第七号 昭和三三年三月

2、△注1▽に同じ

3、△注1▽に同じ

4、△注1▽に同じ

5、△注1▽に同じ

6、岩波文庫「和泉式部日記」解説

7、「和泉式部日記新註」世界社 昭和二十四年七月

8、「原和泉式部集の原型と日記の作者」平安朝日記 日

文学研究資料叢書所収 昭和三十三年一〇月

9、夫木抄卷十三

① かくしつつつ在ふる程に身の露やたまりてしつむふち

となるらん

夫木抄卷十五

② おしなへてまたきまゆみの色つくはいる日をうけて

露や置くらん

夫木抄卷十九

③ ふれは世のいとゝうき身のしらるゝをけふなか雨に

水増さらなん

夫木抄卷二十二

④ ありとてもとふ人なくてふる里にあめのもりくる音

そかなしき

夫木抄卷二十四

⑤ いつみかは水のみわたの松のうへに出かけすゝし秋

のはつかせ

夫木抄卷二十四

⑥ 梅津河のせきの水も洩るなかとりにける身をまつ

そうらむる

夫木抄卷二十六

⑦ いまはよもきゝもせしかしおほ水のふかき心はなに

と見せつゝ

(山田清市氏「原和泉式部集の原型と日記の作者」による)

10、「和泉式部物語」平安朝日記Ⅱ 日本文学研究資料叢

書

11、講談社文庫「和泉式部日記」解説

12、「和泉式部日記成立考」平安文学研究 第一六輯 昭

和二十九年一二月

13、△注6▽に同じ

14、「和泉式部日記詳解」(小室由三・田中栄三郎・白帝社)の中で指摘される。昭和一二年七月

15、「和泉式部日記著作についての一試論」平安文学研究第二六輯 宮本芙万子 昭和三六年六月

16、鈴木一雄氏が、「全講和泉式部日記」(至文堂)で指摘されている。

17、△注15▽に同じ

18、鈴木一雄「全講和泉式部日記」解説 至文堂